

## 研 究 成 果 報 告 書

(ふりがな) みやざき りょう

氏 名 宮崎 遼

現 職 駒沢学園女子高等学校 教員

平成25年度修了、学校教育専攻 学校臨床研究コース

高等学校の「英語コミュニケーション」の授業における思考力を高める実践研究  
－改訂版ブルームの分類法を用いたCLILタスクの開発と実践を通して－

## 1. 研究の背景と動機

文部科学省は予測困難な時代に対応するために、改訂した高等学校学習指導要領を2018年に告示した。改訂された指導要領では、「思考力・判断力・表現力等」は重要な資質・能力の一つとして再整理され、学校教育を通して育成していくことが求められている（文部科学省，2018）。

しかし、先行研究（小林・星野，2022；鈴木，2023；平川・萬谷，2018；宮崎・田中・青山，2025）から検定英語教科書の設問・課題の多くは思考力をあまり必要としないもので構成されていることがわかっている。Miyazaki(2024)は検定英語教科書だけでは生徒の思考力・判断力・表現力を十分に育成することが難しいため、教員は自ら思考力の育成につながるContent and Language Integrated Learning(CLIL)タスクを開発し実践する必要があると述べている。

そこで、本研究では高校2年生の「英語コミュニケーションII」の授業の中で、改訂版ブルームの分類法を用いて、思考力育成を目指したCLILのタスクを開発・実践することにした。事後アンケートの結果を分析し、生徒の思考力育成につながるタスクであったかを考察した。

## 2. 先行研究

CLILには四つのC(Content, Communication, Cognition, Community/Culture)と呼ばれる重要な要素があり、Cognition（思考）はそのうちの一つに含まれている（渡部・池田・和泉，2011）。CLILで思考力を育成する際に参考にされているのが改訂版ブルームの分類法である。改訂版ブルームの分類法では、認知レベルを六つに分類している（Anderson & Krathwohl，2001）。下から Remember（記憶する）、Understand（理解する）、Apply（応用する）、Analyze（分析する）、Evaluate（評価する）、Create（創造する）のレベルに分かれており、上に上がるにつれて複雑化し、思考力がより必要となる（図1）。上の三つ（Analyze, Evaluate, Create）が高次の思考力、下の三つ（Remember, Understand, Apply）が低次の思考力と呼ばれる（渡部・池田・和泉，2011）。

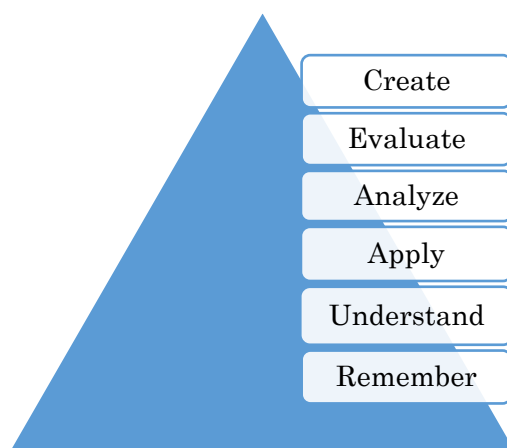


図1 改訂版ブルームの分類法

出典：Anderson & Krathwohl(2001)を基に筆者作成

各認知レベルの日本語訳は以下の通りである（表1）。

表1 Anderson & Krathwohl(2001)による定義を筆者が翻訳

Create (創造する)	要素を組み合わせて一貫性のある、または機能的な全体を形成する；要素を新しいパターンや構造に再編成する。
Evaluate (評価する)	基準や標準に基づいて判断する。
Analyze (分析する)	材料をその構成要素に分解し、各部分が互いに、また全体の構造や目的にどのように関連しているかを判断する。
Apply (応用する)	特定の状況で手順を実行する、または使用する。
Understand (理解する)	口頭、書面、視覚的なコミュニケーションを含む指示メッセージから意味を構築する。
Remember (記憶する)	長期記憶から関連する知識を取り出す。

これまでに改訂版ブルームの分類法を活用した思考力の育成を目指したCLILの実践は、中学校（宇田, 2021; 漢那, 2022; 田口, 2025）や大学（工藤, 2018; 松島, 2020）では先行研究が見られるが、高校ではこの観点からの研究はまだ限られている。

### 3. 研究の目的と方法

本研究の目的は二つある。一つ目は、改訂版ブルームの分類法を用いて思考力・判断力・表現力を育成するCLILタスクを開発することである。二つ目は、開発したCLILタスクを実践して生徒の思考力・判断力・表現力の変容を見取り、その効果と課題を検証することである。

本研究では、まず初めにCLILタスクの開発に取り組んだ。具体的には、CLILのタスクにAnalyze, Evaluate, Createの高次の思考力のレベルの活動を取り入れて、生徒の思考を段階的に深める単元構成にした。その次に、本校の高校2年生英語クラス12名を対象に、英語コミュニケーションIIの授業で開発したCLILタスクを実施し、生徒の思考力・判断力・表現力の変容を見取り、分析・考察を行なった。

### 4. 授業の実施

本研究は2026年1月から2月にかけて高校2年生の英語クラス12名を対象に「英語コミュニケーションII」の授業で実施した。『LANDMARK English Communication II』（啓林館）のLesson8 Edo: A Sustainable Societyの内容を理解した後に、発展的な学習としてSDGsに関するプレゼンテーションをするCLILタスクに取り組ませた。単元は主に三つのステージに分けられる。ステージ1は、教科書の本文理解の段階である。生徒は教科書の本文理解に必要な新出単語を学び、Q&AやT/Fなどの読解問題に取り組み、教科書の要約を行った。ステージ2は、高次の思考力のタスクに取り組むステージ3に向けた準備段階である。SDGsの問題解決につながるプレゼンテーションを行うために、ペアで調べ学習を行い、考えを整理させ、発表スライドと発表原稿の作成に取り組ませた。ステージ3は、ステージ1とステージ2を土台に、高次の思考力が必要とされるAnalyze, Evaluate, Createのレベルの活動に取り組ませた。単元計画の概要は次の通りである（表2）。

表2 単元計画の概要

ステージ	配時	学習内容	認知レベル
1 (LOTS)	1	○SDGsのゴール12について学ぶ。 「つかう責任, つくる責任」	Remember Understand
	2-6	○江戸時代の持続可能な社会について学び, 班でスライドを作成し発表する。	Remember Understand Apply
2 (LOTS & HOTS)	7-12	○プレゼンテーションの目的, やり方, スケジュールについて学ぶ。 ○SDGsゴール12の問題を調べ, 問題解決につながるユニークな仕事を考える。 ○スライドを作成し, 発表練習を行う。	Apply Analyze Create
3 (HOTS)	13 本時	○SDGsゴール12の問題解決につながる仕事をプレゼンテーションする。 ○ルーブリックを用いてプレゼンテーションの評価を行う。	Analyze Evaluate Create

Lesson 8では、江戸時代の持続可能な社会を実現する仕事が登場するが、本時ではそうした仕事を基に、令和版の持続可能な社会を実現する仕事を考案・発表させた。発表内容は、導入、問題、問題の原因、仕事の特徴、まとめの五つに分けて発表させ、評価の観点は説得力(Persuasiveness)、現実性(Reality / Feasibility)、仕事のユニークさ(Uniqueness)、スライド(Slides)の四つとした。ルーブリックは以下の通りである（表3）。

表3 評価ルーブリック

観点	4 とても良い (Excellent)	3 良い (Good)	2 もう少し (Fair)	1 改善が必要 (Needs Improvement)
① 説得力 (Persuasiveness)	理由や具体例が明確で、説明の流れも論理的である。	理由や例があり、説明の流れもだいたい論理的である。	理由や例が少なく、説明の流れがやや分かりにくい。	理由や例がほとんどなく、説明が論理的でない。
② 現実性 (Reality/ Feasibility)	実際にありそうで、社会で役立つ仕事だと思える。	少し工夫すれば実現できそうである。	面白いが、実現するのは難しそうである。	現実的ではなく、想像だけの仕事である。
③ 仕事のユニークさ (Uniqueness)	とても新しく、他の人と全く違う独創的なアイデアである。	工夫があり、面白さや新しさがある。	よくあるアイデアに少し工夫を加えたもの。	ありきたりで、新しさがほとんどない。
④ スライド (Slides)	見やすく、英語も正しく、発表内容をよく助けている。	だいたい見やすく、内容も理解できる。	文字が多い、または分かりにくい部分がある。	見づらく、発表の助けになっていない。

生徒ができるだけ興味関心を持って取り組めるように、生徒のユニークなアイデアを大切にしたい。生徒が考案した仕事の一覧は、以下の通りである（表4）。

表4 生徒が考えた持続可能な社会の実現に必要な新しい仕事

ペア	仕事名	仕事内容
1	Marine Drone Pilot	ドローンを使用して海上のゴミを見つけ、水上のロボットでゴミを回収する。
2	Sea Saver	ロボットを操作して海底に溜まったゴミを回収する。
3	Re: Fabric Corporation	古着の服を回収して、新しい商品に蘇らせる。
4	Waste×Global Warming Hunter	二酸化炭素の排出量を地域で管理し、二酸化炭素削減に向けてアドバイスをする。
5	Crow Squad	カラスに GPS を付けてゴミを発見し、効率的にごみを回収する。
6	Regeneration Architect	ゴミを再利用して建物を建築設計する。

指導上の工夫として、生徒のエンゲージメントを促すとともに、足場架け(scaffolding)を意識した授業設計を行った。

まず、生徒のエンゲージメントを促すために、プレゼンテーションの評価を教員による評価のみならず、生徒同士による相互評価も取り入れた。これにより、発表者は教員だけでなく、同じクラスの生徒全員を意識した発表を行うようになると思った。さらに、発表の評価活動に「投資」という要素を導入した。具体的には、各ペアにゲーム用のドル札を約 1000 万円分与え、自分たち以外の五つのペアに対して、どの程度の金額を分配するかを検討させた。この活動を通して、聞き手である生徒は各発表内容を比較しながら、どの発表にどれだけ投資する価値があるのかを、批判的思考を働かせて評価することにつながると考えた。さらに、発表者が「できるだけ多くの投資を集める」ことを目標とすることで、聞き手にとって説得力のある内容や分かりやすい伝え方を工夫するようになると思った。

次に、足場架けとして生成 AI を活用した。本授業で生徒が考案した仕事は、現実にはまだ存在していない、あるいは一般的に十分知られていないものが多く、既存の写真や動画を用いて具体的に紹介することが難しかった。そこで、ChatGPT を用いて、自分たちが考えた仕事のイメージ画像を作成するよう指示した。これにより、抽象的になりがちなアイデアを視覚的に具体化し、発表内容の理解が深まると考えた。加えて、発表原稿についても教員による指導に加え、ChatGPT による添削を取り入れた。生成 AI からのフィードバックを活用することで、生徒が自分の考えをより正確かつ分かりやすく表現できるようにした。

### What Does Marine Drone Pilot Do?



図 2 生徒が作成したスライド例 1

### SEA SAVER

This job involves diving into the ocean to pick up trash and help solve the problem of marine debris, thereby protecting the safety and comfort of marine life.



図 3 生徒が作成したスライド例 2

## 5. 分析

事後アンケートの結果から、生徒全員が今回の実践を通して多く考えたり、判断したり、表現したりしていたことが明らかになった。「今回のSDGsに関するプレゼンテーションでは、たくさん考えたり、判断したり、表現したりしましたか」という質問には、8名が「よく当てはまる」と回答し、4名が「当てはまる」と回答した。「あまり当てはまらない」および「全く当てはまらない」と回答した生徒は0名であった（表5）。

表5 思考力・判断力・表現力に関する事後アンケート結果（N=12）

選択肢	人数	割合
よく当てはまる	8	67%
当てはまる	4	33%
あまり当てはまらない	0	0%
全く当てはまらない	0	0%

「よく当てはまる」または「当てはまる」と回答した12名が挙げた理由としては、多いものから「SDGsの問題についてたくさん考えたから」（6件）、「発表方法を工夫したから」（6件）、「スライドを工夫したから」（6件）、「オリジナルの仕事を考えたから」（4件）、「ペアワークを頑張ったから」（4件）であった（表6）。

表6 多く考えたり、判断したり、表現したりした理由

多く考えたり、判断したり、表現したりした理由	記述件数
SDGsの問題についてたくさん考えたから。	6件
発表方法を工夫したから。	6件
スライドを工夫したから。	6件
オリジナルの仕事を考えたから。	4件
ペアワークを頑張ったから。	4件

「SDGsの問題についてたくさん考えたから」と回答した生徒は、自分たちが選んだSDGsの問題と現状を調べ、どのようにすれば解決できるかを考えたと記述していた。「発表方法を工夫したから」と回答した生徒は、聞き手が発表を理解できるように語彙、文法、話し方を工夫したと記述していた。「スライドを工夫したから」と回答した生徒は、わかりやすさを意識して例、グラフ、写真を載せたり、文章と写真のバランスを考えたり、情報の取捨選択を行ったことを記述していた。「オリジナルの仕事を考えたから」と回答した生徒は、SDGsのゴール達成のために必要な仕事内容を考えたと記述していた。「ペアワークを頑張ったから」と回答した生徒は、ペアで仕事内容、原稿、スライドを考え、発表練習を行ったと記述していた。

「SDGsの問題に対して理解は深まりましたか」という質問には、6名が「よく当てはまる」と回答し、6名が「当てはまる」と回答した。「あまり当てはまらない」および「全く当てはまらない」と回答した生徒は0名であった（表7）。

表7 SDGsに関する理解の変容の事後アンケート結果（N=12）

選択肢	人数	割合
よく当てはまる	6	50%
当てはまる	6	50%
あまり当てはまらない	0	0%
全く当てはまらない	0	0%

「プレゼンテーションを通して自分の英語の力は伸びたと思いますか」という質問には、3名が「よく当てはまる」と回答し、8名が「当てはまる」と回答した。1名が「あまり当てはまらない」と回答し、「全く当てはまらない」と回答した生徒は0名であった（表8）。

表8 英語力の変容に関する事後アンケート結果（N=12）

選択肢	人数	割合
よく当てはまる	3	25%
当てはまる	8	67%
あまり当てはまらない	1	8%
全く当てはまらない	0	0%

「4技能のうちどの力が伸びたと思いますか」という質問には、3名が「リスニング」、10名が「スピーキング」、3名が「ライティング」と回答した。「リーディング」と回答した生徒はいなかった。

表9 4技能の変容に関する事後アンケート結果（複数回答可）

選択肢	人数
リスニング	3
リーディング	0
スピーキング	10
ライティング	3

## 6. 考察

事後アンケートの結果から、本実践におけるCLILタスクの開発と実践は、生徒の思考力・判断力・表現力の育成に一定の成果を示したと考えられる。「今回のSDGsに関するプレゼンテーションでは、たくさん考えたり、判断したり、表現したりしましたか」という質問に対しては、8名が「よく当てはまる」、4名が「当てはまる」と回答し、全員が肯定的な回答を示した。またその理由として、「オリジナルの仕事を考えたから」「スライドを工夫したから」「発表を工夫したから」などが挙げられ、高次の思考力を必要とする活動への言及が見られた。以上の結果から、高次の思考を伴う活動を取り入れることが、生徒の思考力・判断力・表現力の育成につながる可能性が示唆された。

また、指導上の工夫として取り入れたエンゲージメントの促進と足場架けは、高次の思考力を伴う活動において重要な役割を果たしたと考えられる。生徒同士の相互評価に加え、「投資」という要素をプレゼンテーション活動に取り入れたことで、生徒は聞き手を意識した発表を行うようになり、スライドや発表方法に工夫が見られるようになった。この傾向はアンケート結果からも確認された。さらに、聞き手側の生徒も、投資金額をどのように配分するかについてループリックを参照しながら検討し、批判的思考を働かせて評価する様子が見られた。評価シートのコメントや発表後のQ&Aでは、発表方法の改善点や仕事の現実性に関するコメントや質問が多く見られた。これらの点から、本活動は生徒の発表内容のみならず、発表方法や提案内容の妥当性について批判的に検討する機会として機能していたと考えられる。

一方で、今後の課題としては英語力の変容に関する点が挙げられる。「英語力が伸びたと感じるか」という項目に対して「あまり当てはまらない」と回答した生徒が1名おり、また「リーディングの力が伸びた」と感じた生徒はいなかった。これらの結果から、本実践では英文資料を読む活動が十分ではなかった可能性が示唆される。今後は、日本語と英語の言語使用のバランスに配慮しながら適切な足場架けを行い、生徒のエンゲージメントを維持・促進するとともに、英語による活動をより充実させていくことが重要であると考えられる。

## 7. 引用文献

- 宇田竜子・大嶋秀樹 (2021) 「深い学びを促す思考・教科・内容・文化統合型CLIL指導による中学校英語の授業の取り組み」『滋賀大学教育学部紀要』70, 245-259
- 漢那有希子 (2022) 「考えを深め、英語で表現する力を育成する授業づくりの研究—CLIL (内容言語統合型学習) の活用を通して—」琉球大学博士論文
- 工藤泰三 (2018) 「地球的課題を扱うCLIL授業実践における高次思考を促す試み」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』29(2), 39-50 <https://doi.org/10.15012/00001070>
- 小林夏音・星野由子 (2022) 「小学校・中学校の英語教科書におけるブルームの6分類法に基づく思考力の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』70, 307-312  
<https://doi.org/10.20776/S13482084-70-P307>
- 鈴木誠 (2023) 「英語教科書のタスクや活動にみられる『質問』の考察—国際バカロレアのEnglish Bと文部科学省検定済教科書の比較から—」『神戸英語教育学会紀要』38(1), 17-28 [https://doi.org/10.32251/kelt.38.1\\_17](https://doi.org/10.32251/kelt.38.1_17)
- 田口美希 (2025) 「中学校外国語科における『批判的思考力』を育成する言語活動の在り方—CLILの要素を取り入れたディスカッションを活用した授業作り—」『Immaculata』29, 1-12
- 平川晴菜・萬谷隆一 (2018) 「思考力・判断力の視点からの国内外の小学校英語教科書・教材における活動分析」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』69(1), 139-147  
<https://doi.org/10.32150/00006697>
- 松島恒熙 (2020) 「大学英語教育における哲学対話のCLIL的实践」『帝京科学大学紀要』16, 151-157
- 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 総則編』文部科学省  
[https://www.mext.go.jp/content/20250213-mxt\\_kyoiku01-100002620\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20250213-mxt_kyoiku01-100002620_1.pdf)  
(2026年1月2日閲覧)
- 宮崎遼・田中真由美・青山拓実 (2025) 「思考力とエンゲージメントの観点による高校英語教科書の設問・活動分析」『全国英語教育学会第50回記念埼玉研究大会 予稿集』
- 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011) 『CLIL (内容言語統合学習) —上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法—』上智大学出版
- Anderson, L. W., & Krathwohl, D. R. (Eds.). (2001). A taxonomy for learning, teaching and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives: Abridged edition. Pearson Education.
- Miyazaki, R. (2024). Using Revised Bloom's Taxonomy to Evaluate Higher Order Thinking Skills (HOTS) in Tasks From an 8th Grade English Language Textbook in Japan. Southeast Missouri State University.